水奈酉紫恵の観殺日記

メネ@分家

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
水奈酉紫恵の観殺日記

【Ｎコード】
Ｎ１８２７Ｑ

【作者名】
メネ@分家

【あらすじ】
殺人大好きっ子の女の子（ただし成人）がヒトを殺して日記につづる物語。彼女は一体、何人を殺すのでしょうか。

友人に宛てた手紙より

親愛なる貴女へ。

本当に親愛かどうかは貴女のみぞ知る、とりあえず私が信頼をおける相手として貴女を選ぶことにしました。

私がつい先ほど思いついた画期的な考えを誰かに知らしめたく、この手紙を書いています。だって、私の行為の深遠なる理由を誰も知らないなんて、馬鹿げているにも程があるでしょ。作品というものは、誰かに見せるために作るのだから。少なくとも、私個人はそう思っているの。

ねぇ、私の敬語って変？　こういう手紙を書くときだけは、ちゃんと授業でも受けていれば、なんて思います。本当に、こういうときだけ。

そろそろ残りの行が少なくなってきました。もう少し大きめの便箋を買った方が良かったと反省してます。後悔は、よく分かりません。どんな感情か知らなくて。

考えについては、別の紙に書いておきます。たぶん、この便箋と同封されてます。数分後の私が心変わりしない限りは。

お元気で。

追伸：今年のお祭りは行った？　私は一応行ったけど、待っていても彼らが来るはずないので、すぐ帰りました。部活が無いと寂しいですね。

ハジメテ（前書き）

安心のグロ描写……かと思いきやそこまでグロくなかった件（量的な意味で

執筆期間にバラつきがあるため、描写がいろいろとブレています。ご了承くださいませ。

ハジメテ

ついさっき書き終えた手紙を手に、玄関を出る。もう二度とここには帰らないだろうという事を想いながらも、あえて振り返らなかった。そもそも、思い入れなどまったくない部屋を見たところで、一体なんだというのか。しかし王道ならば、ここで振り返って涙する、というのがベター。……もちろん、その程度のために流す涙なんて無いけれど。

まだ夏に入ったばかりだというのに、蝉時雨はやかましくてしょうがなかった。都会の喧騒よりは幾らかマシでもあったが、しかし蝉を全滅させるスイッチがあるならば迷わず押す。待てよ、そんな事したら蝉の死体が巷にごろごろ転がるのか？　騒音か死体か、結構な悩みどころである。

どうしようもない感慨にふけるのも終わりにして、意識を現実に戻した。友人が手配してくれたマンションは中々綺麗で、普通に暮らすには十分すぎるほど。……隣の部屋にいるはずの友人は、まだ寝ているだろうか。

どうか気づきませんように、と慎重に手紙を郵便受けに差し込む。手を離したときに小さな音が鳴ったが、幸いなことに誰かが動く気配は無かった。一歩、扉から離れる。今なら、……そう、今なら。中に押し入って、「さようなら」と口頭で告げる事もできる。でも、そうすると、きっと友人は私を引き留めようとするだろう。

会いたい気持ちは確かにある。だけど、そうする事が正解ではないと思う感情があるのも確かだ。手を伸ばして、ドアノブに触れた。ひんやりした金属の感触が肌に心地よい。その手をゆっくりと捻って、

扉を開けずに言う。

「……では、また。いつか会わない事を、願ってます」

気持ちがぐらぐらと揺れるままに放った挨拶は、同じようにぐらぐらと揺れていた。覗き穴から中が見えないかなぁと顔を近づけたものの、カーテンすら開けてないのか真っ暗でよく見えない。額を扉にぶつけて、昔からの友人を想う。

蝉がうるさかった。

＊　＊　＊

くそう、と月明かりの下で悪態を吐く。

ホテルの滞在を断られたのは、今ので六軒目だ。さすがにイライラしてきた。こうなったら誰かの同伴者を装って――なんて、不可能に決まってるけど。

しかしどうする。一応寝袋は用意してあるが、それは最終手段。室内でさえ蚊を筆頭とする虫が猛威を振るっているのに、野外で就寝など言語道断。一睡だけでもできたなら上々、である。その前に、生理的な嫌悪感が背筋を走った。狙う側は、常に狙う側に立たなければならない。狙われるのは、私ではない。

バッグの中に手を突っ込み、木の柄を掴む。募っていた負の感情が、正とは言い難いまったく別の感情によって、流されていくのが分かる。表すとしたら、無想。いや、仏教徒でもないのだから……無心、か。さっきの「まったく別の感情」は訂正しよう。

無が、生まれる。感情が死んでいくというよりは、無が生まれてくるの方が正しいような気がした。……それなら、死も、生まれるになるのか。死、なのに、生。模範的な矛盾に、どこか面白さを覚える。誰かに聞かせてあげたい。死は、生まれるものですよ、と。

あははと空笑い。誰か聞いてくれないかな、

「あのっ」

「……は、い？」

声を掛けられたことに一度驚き、その声が男のものだなぁと二度

驚き、それから私に声を掛ける勇気に評して三度驚いた。それよりもこの時間に外を出歩くとはなんともおかしな奴だ、と考えたところで自分もそうだなと気が付く。
もしかして、ナンパか。
そう問おうとする前に、声を掛けてきた男は私の手を引いた。条件反射で払いのけようとするも、意外と力が強い。連れ歩きながら前の方で何か言っているがどうにも聞こえない。男なら大きな声を出せよ、なんて言いかけたがやめる。今は「か弱いオンナノコ」を演じていた方が良いと判断して、余計な口はふさいだ。

準都会ならどこにでもあるような普通のマンション――それが第一印象だった。どうやらここが男の家らしい。
セールスマン寄りの笑顔で野球部ばりの力を以て私を部屋に押し込む。もはや抵抗は（どちらかというと面倒くさいので）できなかった。殺風景だが、どこか女っ気も混じったような簡素な部屋。
「ほら、まぁ、座ってよ」
そう言いつつ閉めた錠は一体なんだ。閉じ込める気か、殺すぞ。本当の意味で。
などと口にする理由など無く、許可に見せかけた命令に従う。いつまでお面を被っていようかなぁと考察しながら、被ったままでも別にいいよなぁとも思った。
「……何の用ですか」
「え？　いやいや、うん、何の用って言われてもね、あはは」
あははじゃなくて答えろと。それでいて誤魔化したと思わせないような笑顔である。その笑顔を壊したらどうなるだろう。泣くか、怒るか、絶望するか。
「あ、待っててね。今飲み物取ってくる」
「いりません」
はっきりと拒絶を申告したにもかかわらず、いいよいいよ遠慮し

なくても、と理解してるのかしてないのか判断しかねる答えが返ってきた。遠慮を省いた上で断わったのだが、彼は頭が良いのか悪いのか。良いと仮定したなら、遠慮云々でなく別の目的があったことになる。たとえば睡眠薬とか……待てよ、飲まなかったら万事オッケイだ。このドジっ子さん、てへっと全くもって似合わないナレーション効果音に自己嫌悪した。

キッチンで何をしているのかはよく見えない。仮に猛毒の青酸カリを入れようとしていても、私にはまったく気づかれないという事だ。……もっとも味が強いのだから、飲もうとした瞬間に分かるだろうが。先にワインでも飲んでいようかな、と浅学で適当に考えた。

「はいコーヒー、砂糖いる？」

「貴方がそうしたければどうぞ。どちらでも構いません」

それはありがたいね、ははは……とここでも笑うかこの男は。どうにも苦手だ、このタイプ。多少血の気が多い方が得意だけど、逆にこういう奴を堕としてみたいとも思う。何分ぐらいかかるかな、と時計を確認した。

午後九時三十八分。

黒いコーヒーにぼんやりと映る自分の瞳を数秒見つめて、それから顔を上げた。

開口一番、何を言おうか。貴方を殺しますでは面白味が無いし、世間話も苦手、何も言わずにという手は論外である。そして散々悩んだ挙句に、やっと声帯を震わせた。

「名前は、なんですか」

我ながら馬鹿だろうと自嘲する。今更名前を尋ねて、一体何がしたいのか。ニンゲンって迷うと面白い事を口走るのか。

幸いだったのは男がそれに乗ってくれたことだった。

「僕の名前？　ああ、うん。小野崎巧って言うんだけどね」

「オノザキタクミですか。……面白いです」

「え、どの辺が？　教えてよ」

迷わず答えるところが、とは言わなかった。まだ、もう少し引っ張りたい。
「それは教えません。……どうして、私を連れてきたんですか」
答えは特に期待してないが、一応聞いていても悪くはないだろう。馬鹿みたいな返答の方、宜しくお願いしま
「前の彼女に似てたから」
「は？」
ちょっと待て、それは予想外だ。というか「前の彼女」ってどういうことだ、すでに私が「今の彼女」という位置づけになってるような言い方だけど、そんな会話も儀式も行っていない。何かの病気を発症しているんじゃないだろうか、今に首をガリガリし始めるかもしれない。
小野崎はさも涼しげな顔をして、「チョコ？　ああ、十個くらい貰ったよ」と当たり前のように語るイケメンの雰囲気を醸し出している。ちなみに今は六月だ。
「あー、うん、分かんないよね。なんて言えばいいかなぁ……ええと、弱いのに頑張って強いフリしてる、……かな？」
「自分の意見を疑問形で語らないでください」
それにその考えはまるきり中学生です、と小さく呟いたのはどうやら聞こえなかったようだ。脳内日記に患者の発言として記録しておこうかな。確か、弱いのに、強いフリ。……弱いから、強いフリ？　どっちだろう。私の海馬は数秒前の会話さえ記録できないのか、一体何年モノのアンティークだ。違うけど。
頭の中がこんがらがって訳が分からなくなったので、発狂する前に「ところで」と切り出す。
「『前の彼女』ってどういう意味ですか？」
「うおう、突っ込まれた。やっぱり気になるよねー、あはは」
だからそのあははをやめろと。口裂け女ばりに顔面を切り開いてやろうか、このヤロウ。口裂け男という名前の妖怪は新鮮かもしれない。

「まぁいいや、どうせもう浮気とか関係ないし」
それはつまり……いや、深く考えるのはやめよう。こいつの思考回路は私とは全く別のモノだろうから、全く別の考えで全く別の意味で発言してもおかしくない。……要するに、考えようとする私が馬鹿でした。盛大に笑おうとしたけど狂人っぽく見えそうで断念する。
コツン、と机の裏から軽く音を鳴らし、続きを催促した。そしてもはや常套句のように彼は笑う。
「はは。……実はさ、彼女と別れたんだよね。理由はなんだったっけ、ええと……。あ、そうそう、僕が浮気してるとか疑ってさ、勝手に出てったんだよ。どうしたのかな、あれ。不思議だよなぁ」
それって相手の方が浮気してて、別れるための理由に濡れ衣被せたとしか思えないのだけど。金曜の昼ドラでよくあることではございませんか。
しかし、５Ｗ１Ｈがはっきりしてませんな、ワタクシとしてはそこが気に入りません。確か最初は「いつ」だったかな、……いきなり無いですよ貴方。国語の教師（ただし無免許に限る）として、これは見逃せません。
「それは、今日のこと？」
「あっははは、そうだよ……んん？　……なんで分かったの？　もしかして読心術を持ってるとか」
だから発想が中学生ですよと何度言えば済む。ああ、言ってないから済まないのか、自問自答で見事解決。ぜひこの問答を彼に向けて投げつけてやりたい。願わくば、それが致命傷で逝去なされてください。恥ずかしながら喪主をドタキャンさせていただきます。
さて、もちろん彼は私の脳内問答に気付くことなく話を続ける。私よりも彼に読心術を授けた方が良いと思うけれど、よくよく考えれば私にも読心術は備わってないので意味不明の文だった。
「君って面白いよね、やっぱり彼女に似てる」
「……口説くセンスをもう少し磨いてください」

「えーいや口説いてるわけじゃないよ、あ、でも彼女になってくれるなら喜んで」
もしもし、頭の中を切り開いてみましょうね、きっと蛆が湧いてますから。脳細胞が若干十割ほど食い荒らされてると思いますよ。脳外科に連絡してあげましょうか。
「ところでさ、」
性懲りもなく小野崎は訳の分からない話を始めようと、接続詞を用いて転換をおこなっ

「その鞄、何が入ってるの？」
あ、元は果物用だったペティナイフです。

などと笑顔で答えられるのは狂人か変人だ。残念ではないけれど、私は前者でも後者でもないと自負している。ただし、他人から見てどうだろうかは知らぬ存ぜぬの領域だ。
しかしどう切り抜けましょうか、そのままの意味で相手に赤い布を被せてもよし。……ああ、良いかもね、それ。安全なフェンスの内側から、外側に立ってるど阿呆を、突き落とすのは慣れている。

『　そうしよう　そうしてしまえ　そうしかない　そうだろう？　』

誰かの声が脳内で木霊して、
身体がそれに合わせた行動を取り始めて、
その後で声が自分のモノだったことに気付いて、
結果を眺めることにした。

「鞄の中身、見てみます？」
強要はしない程度に提案すると、小野崎は何の疑問も疑心も抱かずに近寄ってきた。なぜか表情が嬉々としているが、ネット依存症たちの「細かいことは良いんだよ」という名言を以て気にしないこ

とにする。
「いやぁ、最近はプライバシーとかで見せてくれる人少ないんだよねー。結構楽しみ」
気にしないと決めたはずなのに勝手に教えてくれた。まあどうでも良かったのだけど、と口笛まではいかずとも嘯いてみる。
心折、もとい親切をうすっぺらく顔に貼り付けて、そのまま小野崎を押し倒す。
押す。
倒す。
……いや、雄を押すとか、考えてないから。
「あだっ、頭、頭打った、地味に痛いっ」
彼が妙なことを口走っているが、気にせず床に押し付けて、鞄から取り出したナイフを向けた。蛍光灯の光を受けて、銀色に光る。
ああ綺麗だな、なんて——彼も思ってるのだろうか。
「……綺麗だね」
なんでだよ、と思わず口走った。男勝りな口調になってしまうのは昔からだ、けど、……なんで。
「たぶんさ、初めて、目、見たから。……君、綺麗だよ」
「お世辞でも本音でも、ナイフは戻さない」
そう応えても、やはり彼は怯えない。
「うん、分かってる」
本当は笑顔の仮面を付けているのではないかと思うほどに、彼は笑ったままでいた。どうしてそんなに笑えるのか不思議でならない。自分が笑みと無縁だからこそ、余計に。
言葉を挟まないままで彼を直視したくないから、思いついたことを適当に並べてみた。お品書きは、私の頭の中にすらない。
「……貴方、私が前の彼女に似てると言ったけれど」
「ああ、言ったねそんなこと」
「私と彼女とでは、決定的な違いがある。……分かる？」
分かるよ、と彼は口にする。

「そのナイフを振り下ろすことに、躊躇わないところ」
当たり――そういってナイフを突き立てようとした直前、小野崎が「待って」と声をあげた。今までになく大きな声に、驚いて手を止めてしまう。ナイフはX軸こそ動かなかったものの、Y軸はO点である心臓までおおよそ半分の位置になった。数学的な描写をしてしまったのは、驚きからだろう。
まさか、命乞いか。そう思って失望したが、すぐに考えを改める。彼は今までの笑みを嘘だったかのように崩し、真剣な表情をしていた。
「殺してほしくない人がいるんだ」
どうしてこの男は、私の考えを読める？
まだ人を殺していくなんて、一言も言っていないのに。
「……例の、彼女？」
「いいや違う。彼女はどうでもいい」
きっぱりと言い切る。目はまっすぐ私を見つめたままで、息も上がっていないから嘘じゃないことはすぐに分かった。だからこれから何を語ってくれるかが気になって、手に持つ凶器を静止させる。
「彼女じゃないとしたら、一体誰？」
「外科医だよ。僕の親友なんだ」
「仮にその人を殺さなかったとして、且つそれがスーパーなドクターであったとしても、貴方を死者の国から呼び戻すのは不可能よ」
相変わらずの若干意味不明な言葉につられ、つい脳内描写のようなことを口走ってしまった。少し恥ずかしいけど、小野崎の中学生発言よりは遥かにましであるとは思う。
いきなり長い文章の羅列を耳にした彼は、少し驚いているようだった。
「……初めて長い言葉、聞いたかも」
「ええ、私も初めて長い言葉を言いました」
なぜか笑みが零れる。どちらかと言うと、失笑だとか苦笑という部類だけど、思い返せば小野崎の目前で笑ったのはこれが初めての

気がする。
「その親友、名前はなんて言うんですか」
「ええと、……待て待て。これって、言ったら特定して殺しちゃうんじゃないの？」
「言ったら特定して、間違えて殺さないようにできます」
「ああ、そうか」
実にあっさりと納得して、彼は親友の名を口にした。それを脳みそに貫通するほどに深く刻み付けて、今まで静止させていた腕を動かし始める。
今度は止まらないように、勢いを付けて「あ」
「ちょっといい？」小野崎がまたも呼び止めた。
「君、……君の名前、なに？」
そういえば言ってなかった気がする。しかし、なぜこのタイミングでそれを聞くんだ小野崎は。答える義理はないけれど、答えない利益も見つからなかった。
ただ、
自分の方が圧倒的優位に立っているのに、なぜか小野崎の方が主権を握っているような気がして。それがどこか悔しくて。
最期の最後に、どうしようもない嘘を吐いた。
「私は、……水島青子」
「そう」

そうして刃物が肉を貫いて心臓に到達して薄い膜を切り裂いて、黒と赤を混ぜ合わせたような訳のわからない色をした液体が流れでる。鉄か何かが錆びついた臭いが鼻を刺激し、精神をふらふらと狂わせる。
まるで薬みたいだ、と呟いてみた。
彼の笑みはとっくに崩れていて、笑顔が気持ち悪いぐらいに似合っていたからか、もはや別の誰かとしか思えなかった。実際、死者は生者ではないから、本当に別人なのだろう。

左胸に建立したままのナイフを抜き取ると、それに合わせて血がどぶりと溢れ出た。元々白かったシャツが赤く染まっていく。一部分だけ赤いのがどうも気に入らないから、ついでに腹と二の腕も切っておいた。間違えて自分の指も切ったことは割愛……と書いた時点で割愛されていなかった。

人差し指から流れる血をなめると、特有の気持ち悪い味が舌先を転がった。臭いは平気なのになあ、とボヤく。いや本当に、薬のように楽しめるくらい平気なんですよ。

ものの数十分にしてレッドカーペットになった絨毯の上に仁王立ちして、小野崎もとい、生前小野崎巧であった別人を見つめる。それから持っている血塗れのナイフを見て、もう使えないなあと思い、元小野崎の喉元にぐりぐりと押し込んでみた。なんだかとてもアーティスティックな死体になって、おめでとうと彼に向けて吐き捨てる。殺したのが私で良かったですね、と皮肉は花束の中のメッセージカードに仕込んで。

ふと自分が笑っていることに気付き、わははと大袈裟な声をあげることで誤魔化してみた。

部屋の中にいるのはは私だけなのにね。

6月29日

6月29日　水曜　晴れ

オノザキタクミ

漢字聞くの忘れたけど、たぶん小野崎匠。是非は不明。

最初から最後までよく解らない変な奴だった。

彼女と別れた後らしい。おそらくその彼女は今頃別の彼氏とキャッキャウフフしてるんだろう。特に殺意も芽生えないので放っておく。調べる価値なし。

部屋から服とか服とか服とかを拝借。あとカップもコーヒーとあわせて貰っておいた。（甘くて飲めなかったのでコーヒーは下水道に廃棄）

押し入れに入っていた色々な物の中からアルバムと写真発見。小野崎が写った写真を一枚貰った。なんとなく。

@ペティナイフ・左胸　両腕　腹　喉

追記：

親友がいるらしい。外科医。名前はサジカケイゴ。

もし見つけたらどうにかする。

6月29日（後書き）

「ハジメテ」⇒「6月29日」までで1つの区切りになります。「本編」⇒「日記」という風になってます。
だいたいこんな感じで進んでいく、と思います。心変わりが無ければ。

さて、では感想・批評・ｅｔｃ．、ありましたらどうぞお気軽に。
（，・ω・）メネ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1827q/

水奈酉紫恵の観殺日記

2011年6月6日22時41分発行